

謝辞	3
序文	4
まえがき	7
主要メッセージ	13
エグゼクティブ・サマリー	21

報告書

1 地球の緊急事態に取り組み、 新たな機会を持った持続可能な未来への道筋を示す	47
--	----

第I部：自然を変えることが人類の幸福をリスクにさらす

2 現在のような開発方法は人類の幸福を支える 地球の有限な能力の低下を招く	51
2.1 人類の幸福は地球の自然システムに大きく依存している	51
2.2 経済・金融システムでは自然の収支を明らかにできない	52
2.3 急速に拡大する人間活動が、環境の変化を促進している	53
3 社会は環境被害を抑えるという 約束の大半を守っていない	67
3.1 社会は地球温暖化を抑えるパリ協定を履行する方向には進んでいない	67
3.2 地球上の生命を保護するための目標はどれ一つ完全に達成されていない	69
3.3 世界は土地劣化を回避する方向には進んでいない	71
3.4 大気汚染は人類の幸福を守れるほど十分に軽減されていない	74
3.5 化学物質や廃棄物は必ずしも安全に管理されていない	75
3.6 強力な国際協同行動が地球を保護するオゾン層を回復させている	76
3.7 形態の異なる環境変化が相互に関連している	78
4 環境リスクによって SDGsの達成が脅かされている	87
4.1 環境の悪化は経済成長と貧困撲滅の進歩を妨げる (SDG 1と8)	87

4.2 環境が悪化すると、食料や水を供給する地球のキャパシティが減退する (SDG 2と6)	90
4.3 地球の環境衛生の悪化は人類の健康を損なう (SDG 3)	92
4.4 環境の変化によって不平等がますます深刻化している (SDG 5と10)	94
4.5 環境の悪化は平和促進の取り組みを妨げる (SDG 16)	95
4.6 環境の悪化は持続可能な都市やコミュニティを作る妨げになっている (SDG 11)	96

第II部：人類と自然の関係を変えることが、持続可能な未来への鍵である

5 人類の知識、創意工夫、科学技術、協力によって社会や経済を変え、 持続可能な未来を実現することができる	101
5.1 システムの変革は持続可能な未来の必要条件である	101
5.2 社会変革の介入（レバー）と介入点（レバレッジ・ポイント）	102
5.3 変革を実行し、慣習的な既得権益の障害を打ち破る	104
6 持続可能性を実現するには、 地球環境の緊急事態に共同で取り組む必要がある	107
6.1 この10年のうちに、気候変動への大規模で迅速な行動をとるべきである	107
6.2 生物多様性の保全、持続可能な利用、 回復の規模を拡大し促進することが重要である	109
6.3 土地管理を変えることで、人類のニーズを満たし、 生物多様性と気候を支えることができる	111
6.4 科学に基づく管理によって 人類の健康と環境への化学物質の有害な影響を削減できる	113
6.5 連携した目標と行動は環境と人間開発の両方に社会変革をもたらす	114
7 経済、金融、生産システムを変革して、持続可能性への移行を主導し、 推進力とすることが可能である	119
7.1 経済と金融システムを持続可能かつ公正に変革する	119
7.2 公正で回復力のある食料と水システムに変革する	120
7.3 低炭素エネルギーシステムへと変革し、 すべての人がクリーンエネルギーを利用できるようにすることは可能である	123
8 地球を健康に保つことは、 すべての人に健康と幸福をもたらす鍵である	127

8.1 環境悪化の状況を逆転させれば、人類の健康や幸福への脅威が減少する	127
8.2 平和な社会の推進は環境の悪化を抑える鍵である	128
8.3 都市やコミュニティを持続可能なものにすることが極めて重要である	130
9 すべての当事者には、人類と自然との関係を変えるために果たすべき役割がある	133
付属文書I：この統合報告書で使用された地球環境影響評価	145
用語集	147
略語集	154
参考文献	156
表、ボックス、図	
図KM.1：自然との仲直り	18
ボックスES.1：新型コロナウイルス感染症とワンヘルス	26
図ES.1：環境リスクによってSDGsの達成が脅かされている	27
ボックスES.2：新型コロナウイルス感染症のパンデミックからの回復	29
図ES.2：排出ギャップ	31
表ES.1：人類と自然との関係を変えるための当事者と行動	37
図1.1：気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の評価におけるリスク閾値（いきち）の比較	48
図1.2：成層圏オゾン層破壊の歴史における重要な出来事	49
ボックス2.1：シナリオ分析と共通社会経済経路（SSPs）の役割	54
図2.1：共通社会経済経路（SSPs）	55
図2.2：人類と自然の関係における開発経路	56
図2.3：国家所得別の開発経路	57
図2.4：2017年国家所得別の国内材料消費量とフットプリント	58
図2.5：エネルギー源別の世界の一次エネルギー消費	59
図2.6：哺乳類の生体バイオマスの割合	60
図2.7：2015年頃の地球上の氷に覆われていない陸地の用途	61

図2.8：すべての発生源から排出された世界の温室効果ガス排出量	62
図3.1：直接的なドライバーが世界で主要な生態系に及ぼしている相対的影響	69
図3.2：愛知目標の達成に向けた進捗状況の評価	70
図3.3：2015年～2050年の間に予測される生物多様性の喪失	72
ボックス3.1：土地劣化と土地改変について	72
図3.4：土地劣化の世界地図	73
図3.5：化学物質の増加 1955年～2015年	76
図3.6：成層圏オゾン層破壊の歴史における重大な出来事	77
図3.7：気候的に定められた地理的分布域の50%を失うと予想される種	79
図3.8：気候変動がもたらす人類と生態系への影響とリスク	80
図3.9：気候変動、土地利用、生物多様性の相互作用	82
図4.1：環境リスクによってSDGsの達成が脅かされている	88
図4.2：様々な社会経済経路が気候関連のリスクのレベルに影響している	89
図4.3：環境リスクと人類の健康	92
ボックス4.1：パンデミックのリスク — 新型コロナウイルス感染症の場合	94
表5.1：6つの重要なシステム変革促進における、レバーとレバレッジ・ポイントの行動	105
図6.1：排出ギャップ	109
図6.2：生物多様性喪失の上向き曲線を平坦化する	110
図6.3：地球上の生命の保全と回復のための連携行動	115
ボックス8.1：パンデミックを回避し、持続可能な世界へ移行するために	128
図8.1：病原体の漏洩	129
表9.1：人類と自然との関係を変えるための当事者と行動	134